

①タイワンザル・アカゲザルなど（尾の長いサル）

タイワンザル (*Macaca cyclopis*) オナガザル科 原産地：台湾

導入経緯：動物園や観光施設の飼育個体による逃亡や放獣が原因とされる。
野生化が最も早いのは伊豆大島で、第二次世界大戦末期（1940年頃）
に動物園から逃亡したとの記録がある。

生 態：ニホンザルとの生態学・行動学的な違いについてはよくわかってい
ない。在来種であるニホンザルと交雑することから、遺伝的攪乱が
最も危惧されている

アカゲザル (*Macaca mulatta*) オナガザル科 原産地：中国、インドシナ半島
北部など

導入経緯：動物園や観光施設で飼育されていた個体の逃亡や放獣が野生化の原
因とされる。

生 態：在来種であるニホンザルと交雑することから、遺伝的攪乱が最も危
惧されている。千葉県では交雑が確認されている。

【調査結果概要】

只見町史によると只見町を含む会津地方の各地で、1985年にニホンザルとタイワンザルの交雑種と考えられる尾の長い数頭の個体が確認されている。人馴れした個体であったことから、飼育されていたものが逸出したと考えられている。

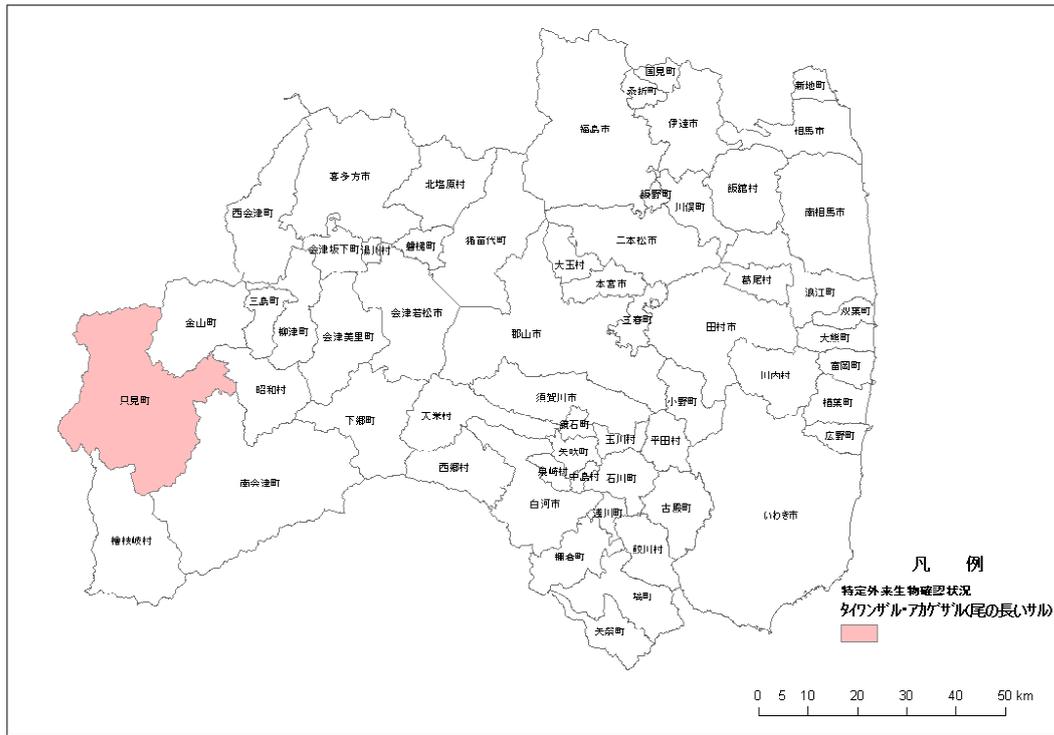
なお、只見町史が発行され現在に至るまで、会津周辺では尾の長いサルの確認情報は途絶えている。

アンケート調査では、南相馬市で目撃情報が寄せられている。専門家へのヒアリングでは、この地域における生息情報は得られなかった。

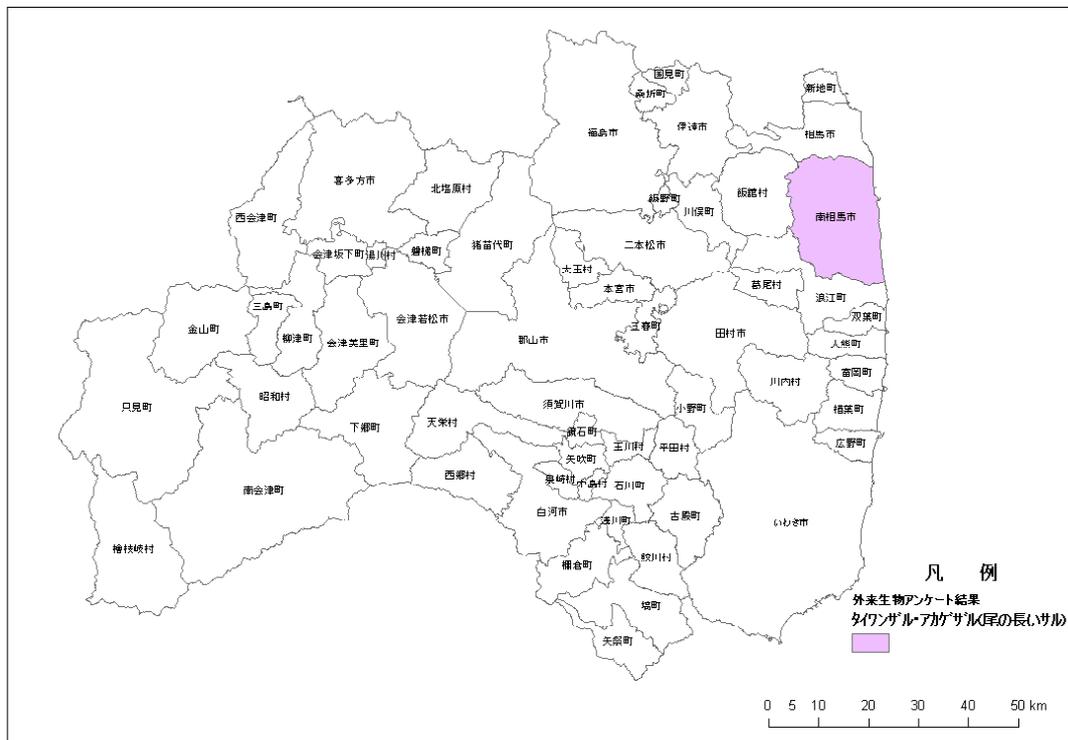
本種による農業被害など影響に関する情報は寄せられていない。

今回のアンケート調査結果からは、交雑化の進行について可能性は否定できないものの、確証を得るまでには至らないことから、今後も目撃された地域を中心とした継続的な情報収集を行っていく必要がある。

文献調査によりタイワンザル・アカゲザルなど（尾の長いサル）が確認された市町村



アンケート調査によりタイワンザル・アカゲザルなど（尾の長いサル）が確認された市町村



②ヌートリア

ヌートリア (*Myocastor coypus*) ヌートリア科 原産地：南アメリカ

導入経緯：1939～49年に軍服用の毛皮獣として全国各地で養殖された。戦後に養殖場が閉鎖され、養殖個体が野外に放逐され定着したと見られる。

現在では、岡山県、岐阜県、愛知県、兵庫県など西日本を中心に生息が確認されている。

生態：泳ぎが得意で水辺で生活する。河川では堤防や土手に直径 20～30 cm、長さ 1～6 m の大きなトンネル(巣穴)を作るため、堤防の強度を弱める可能性がある。草食性で大食漢であり、西日本の個体数が多い地域では、イネや畑の根菜類への被害が甚大である。

【調査結果概要】

飯野町史によると、平成 14 年に町内での目撃情報がある。今回のアンケート調査では、飯野町のほか、新地町においても 1～2 年前に目撃したとの情報が寄せられている。

なお、本種による被害に関する情報は、現在のところ得られていない。

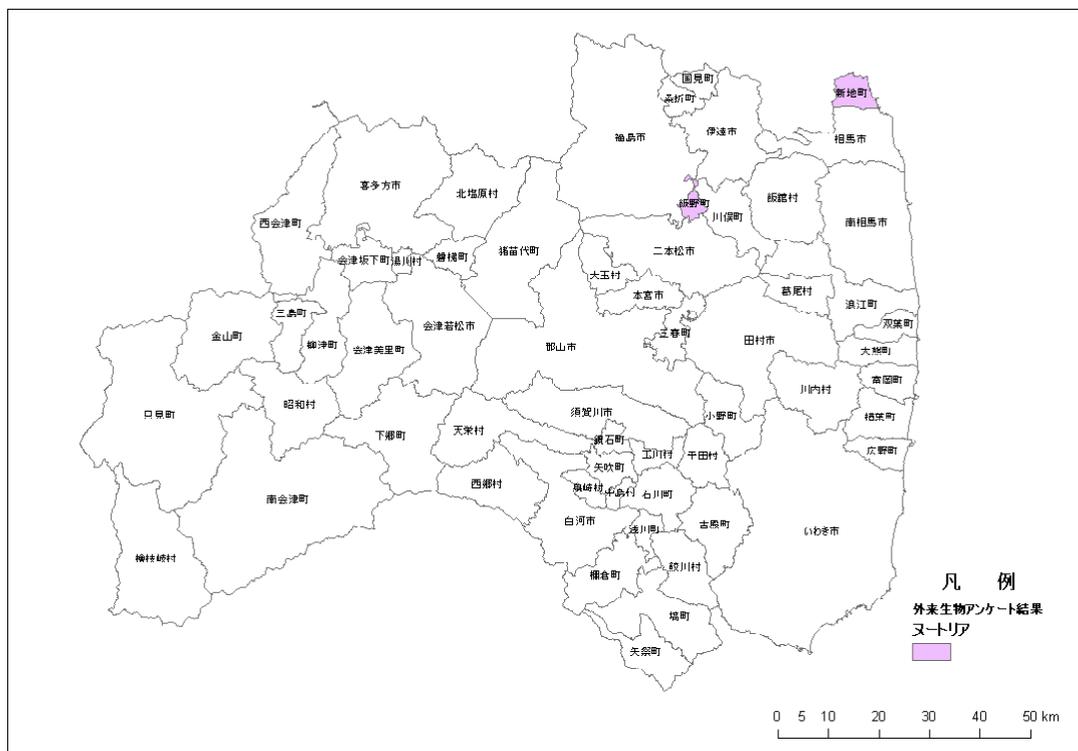
専門家のヒアリングでは、ヌートリアとアメリカミンクは生息環境が似ており、誤認される場合があるとの指摘がある。

現段階では目撃情報が乏しいことから、引き続き生息や影響に関する情報の収集を図る必要がある。

文献調査によりヌートリアが確認された市町村



アンケート調査によりヌートリアが確認された市町村



③アライグマ

アライグマ (*Procyon lotor*) アライグマ科 原産地：北アメリカ

導入経緯：1962年に愛知県犬山市の動物園の飼育個体が逃亡し野生化した。人気アニメの影響でペットとして大量に輸入されたが、繁殖期になると気性が荒くなるため、飼い主が手に負えなくなり野外に放棄するケースが多い。また、手先が器用であることから、檻からの逸出などにより野生化したと見られる。

生態：多様な環境に適応できるが、一般的には水に近い場所を好む。雑食性で、動物全般から果実、野菜、穀類等まで食べることから農業被害とともに在来種への影響が危惧される。1歳の雌の妊娠率が66%(北海道浅野正嗣氏の文献から)、2歳以上の雌で96%と繁殖率が極めて高い。2ヶ月の妊娠期間を経て普通は春に3～4頭の子を産む。

【調査結果概要】

南相馬市原町区（旧原町市）において平成12年に初めて確認されている。

この個体は、ペットとして飼育されていた個体の逃亡・放逐に由来するものと考えられる。

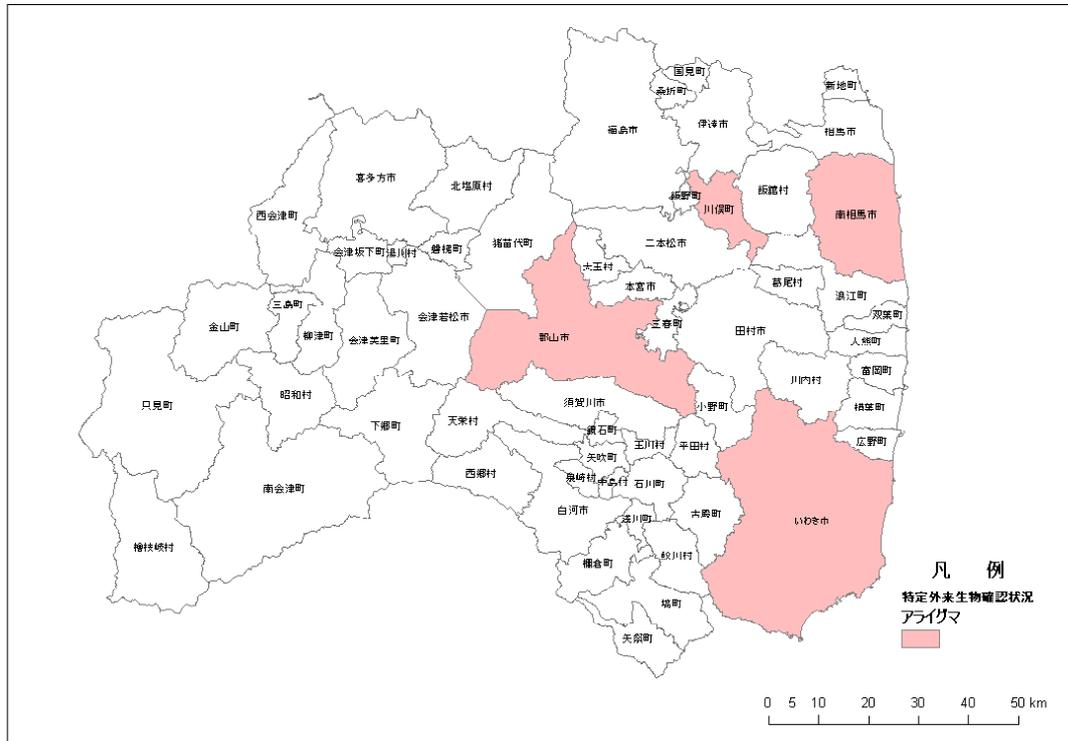
その後、平成17年には郡山市内で、平成18年には川俣町、いわき市で生息が確認されており、アンケート調査による目撃情報等を含めると、県内の8市町村で生息が確認されている。

このことから、浜通り地方では定着の可能性がある、県内においても徐々に生息域を拡大させているものと考えられる。

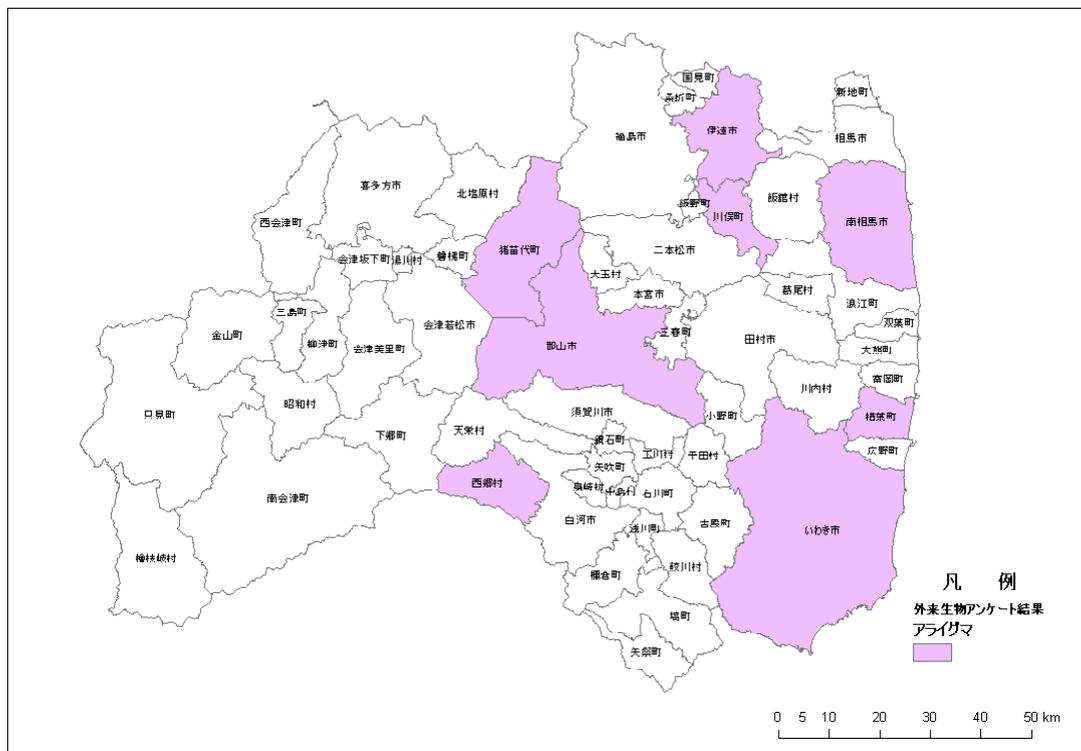
本種による被害については、南相馬市原町区といわき市において、家屋、屋根裏への侵入ならびに糞尿などによる生活環境被害が報告されている。猪苗代町では、畑のトウモロコシが一部倒され食害に遭うといった小規模ではあるが農業被害が報告されており、今後の被害拡大が懸念される。

また、専門家からは、本種の生息域と絶滅危惧種であるトウキョウサンショウウオ（福島県レッドデータブックカテゴリー：絶滅危惧Ⅱ類）の生息域が重なることから、捕食等による影響の可能性について指摘されている。

文献調査によりアライグマが確認された市町村



アンケート調査によりアライグマが確認された市町村



④アメリカミンク

アメリカミンク (*Mustela vison*) イタチ科 原産地：北アメリカ

導入経緯：1950年代から毛皮目的の養殖のため導入が始まった。養殖の中心地であった北海道では、養殖個体の逸出により野生化が始まり、1960年代には定着したと考えられる。

生態：水辺の生活を好む。哺乳類、鳥類、甲殻類など様々な生物を捕食する。水鳥に対して特に強い捕食性があるとの指摘がある。

【調査結果概要】

環境省の鳥獣関係統計によると、福島県内では平成 16 年に須賀川市、郡山市において 1 頭ずつ狩猟捕獲の記録がある。その後、平成 17 年に鏡石町高野池、福島市松川町で確認された後、平成 18 年には郡山市田村町、浅川町小貫地区でも確認されている。

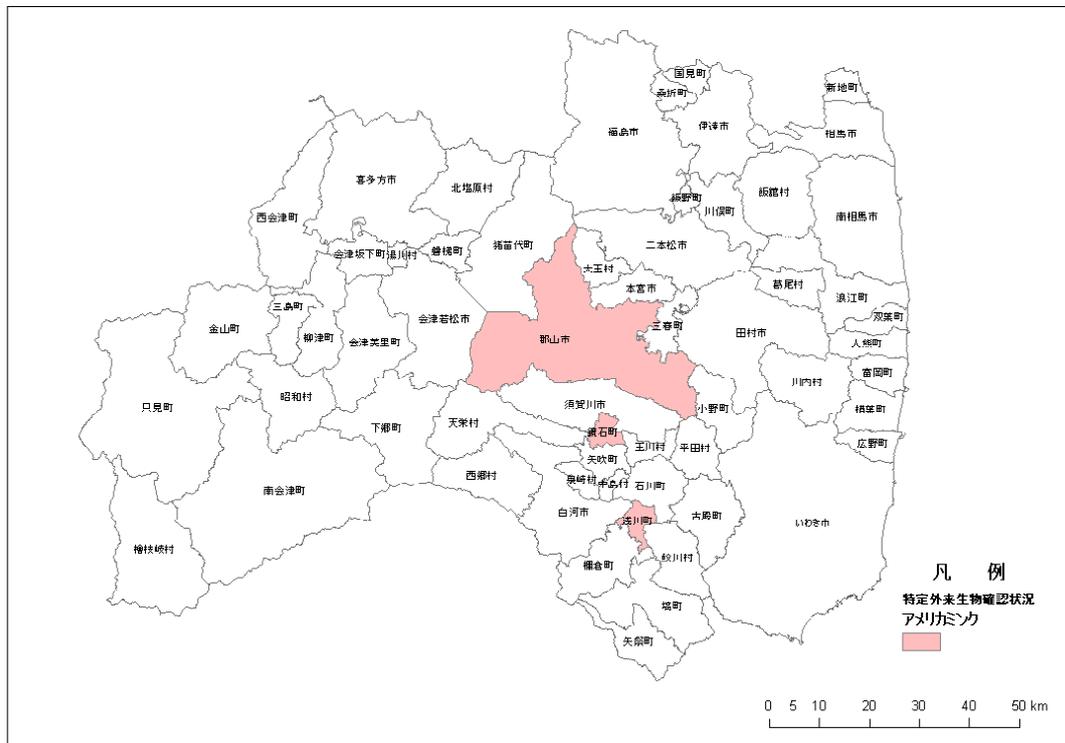
アンケート調査によると、西会津町で 5 年以上前の目撃情報があり、二本松市と郡山市では 3～5 年前に、福島市では 1～2 年前に、浪江町、三春町、本宮市では今年を目撃情報が確認されている。アンケート調査の結果からは、県内における生息範囲はかなり広範であることが伺われる。

本種は肉食、魚食性が強いことから、水産資源への被害の可能性が考えられるが、現在のところ、被害に関する情報は得られていない。

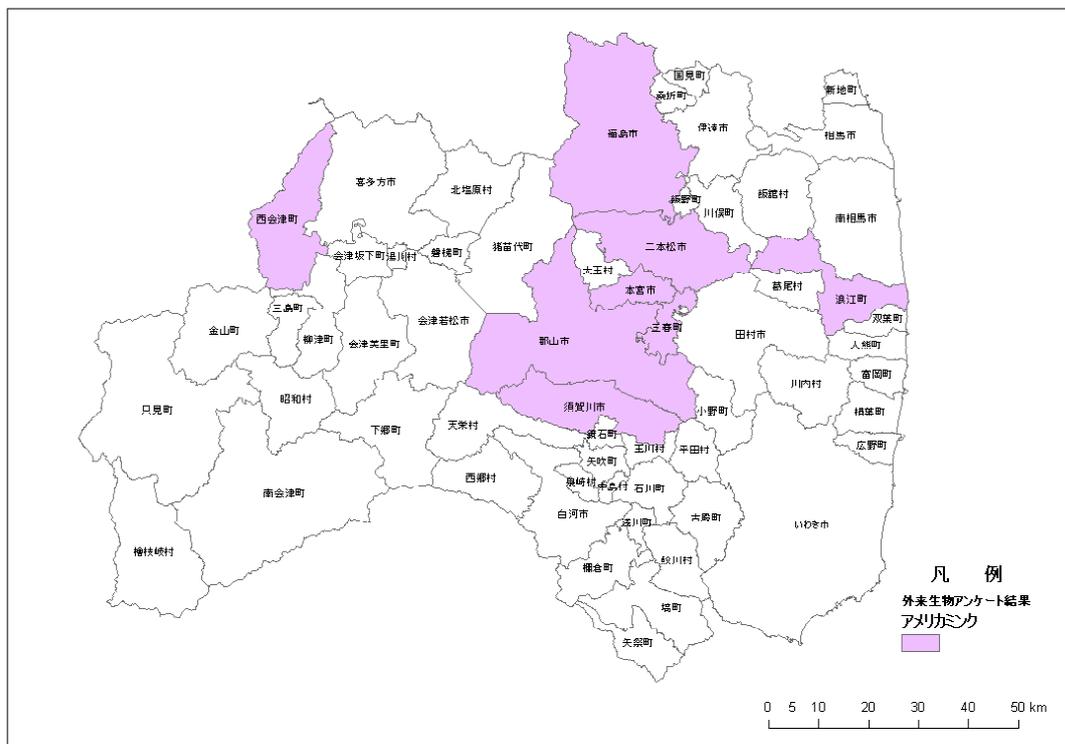


平成18年に郡山市田村町にて確認されたアメリカミンク
(日本野鳥の会郡山支部：佐久間長夫氏 撮影)

文献調査によりアメリカミンクが確認された市町村



アンケート調査によりアメリカミンクが確認された市町村



⑤ガビチョウ

ガビチョウ (*Garrulax canorus*) チメドリ科 原産地：中国南部、台湾、ベトナム等

導入経緯：愛玩用の飼養鳥として輸入されており、逸出した個体が野生化したと考えられる。

生態：森林性の鳥類。渡りは行わず繁殖期には強いなわばり性を示し、低木や地上に営巣する。主に地上で採餌する。

【調査結果概要】

日本野鳥の会福島支部の調査によると、平成8年に川俣町で初めて生息が確認されている。その後、急速に分布を広げており、現時点では、県内30市町村において確認記録がある。地上で採餌することから、冬期の降雪が少ない浜通り地方、中通り地方が生息範囲と考えられる。

今回のアンケート調査の結果からも、ほぼ同様の地域での確認情報が寄せられているが、会津若松市からの目撃情報も寄せられている。

最近、目にする機会が減少した鳥類としては、ウグイスやホオジロ等、里山的な森林環境に生息する種についての回答が多く寄せられている。ガビチョウの侵入により、生息環境が類似している在来種への影響が伺える。

なお、ソウシチョウについては、目撃情報が寄せられなかった。

最近、見かける機会が減少した鳥類

種名	回答件数
ウグイス	11
ホオジロ	4
アオジ	2
カケス	2
コジュケイ	2
サンコウチョウ	2
ヒバリ	2
イエツバメ、エナガ、オナガ、カッコウ、カワラヒワ、キクイタダキ、キセキレイ、クロツグミ、コジュカラ、コムクドリ、サンショウクイ、セッカ、センダイムシクイ、トラツグミ、ヒガラ、ホトトギス、ミソサザイ、モズ、ヤブサメ、ヨシキリ、ヨタカ	各1

⑥カミツキガメ

カミツキガメ (*Chelydra serpentina*) カミツキガメ科 原産地：北アメリカ、中部アメリカ

導入経緯：1960年代から、米国よりペットとして導入され、その後、遺棄されたと見られる個体が全国各地で確認されている。

特に外来生物法の施行後、各地で目撃情報が増えている。

生 態：肉食傾向が強く、魚類、両生類、小型のカメ類、甲殻類、貝類、水生昆虫等を捕食する。様々な動物の死骸や、藻類、水草、陸生植物の果実などの植物質も食べる。

年に一度産卵し、産卵数は20～40個、稀に100個を超えることがある。原産地では上位の捕食者である。

背甲長約50cm、34kgまで成長する。

【調査結果概要】

文献調査では確認されなかったが、アンケート調査により福島市、新地町、郡山市、いわき市の4市町における目撃情報が寄せられた。確認時期については福島市では3～5年前に、郡山市といわき市では1～2年前に、新地町では今年を目撃情報となっている。

いずれも飼養されていた個体が逃亡・遺棄されたものと考えられており、現在のところ野外での繁殖事例は確認されていない。

最近の本種の野外での確認については、外来生物法施行に伴う飼養手続きの煩わしさによる遺棄に起因していると思われる。

こうしたことから、外来生物の野生化による被害、在来生物への影響などについて、県民に広く普及啓発を図っていくことが重要である。

⑦ウシガエル

ウシガエル (*Rana (Aquarana) catesbeiana*) アカガエル科 原産地：北アメリカ

導入経緯：1918年アメリカより輸入。1922年以降、全国で食用に養殖が奨励された。その後、食材としての人気が急速に廃れたことから、膨大な数の個体が放逐され、定着したと考えられる。

生態：極めて捕食性が強く、口に入る大きさであればほとんどの動物が餌となる。他のカエルや小型のヘビ、小鳥、ハツカネズミ、カメの幼体等が餌として記録されている。

雌の蔵卵数^{*}は 6000 ～ 40000 個、一部の雌は年に 2 度産卵する。

※蔵卵数：繁殖期間中に雌が一腹に持つ卵の数

【調査結果概要】

文献調査によると、県内の 24 市町村において確認記録がある。南会津での記録が少ないが、他の地域における分布状況を考慮すると、県内全域に広く分布していると考えられる。

本種は、1922 年に全国各地の水産試験場等に分譲され、食用として飼育が奨励された経緯がある。戦後には養蛙事業は中止されており、膨大な数の放逐が行われたと考えられる。

こうしたことから、他の特定外来生物と比較して、定着してから相当の期間が経過していると考えられる。

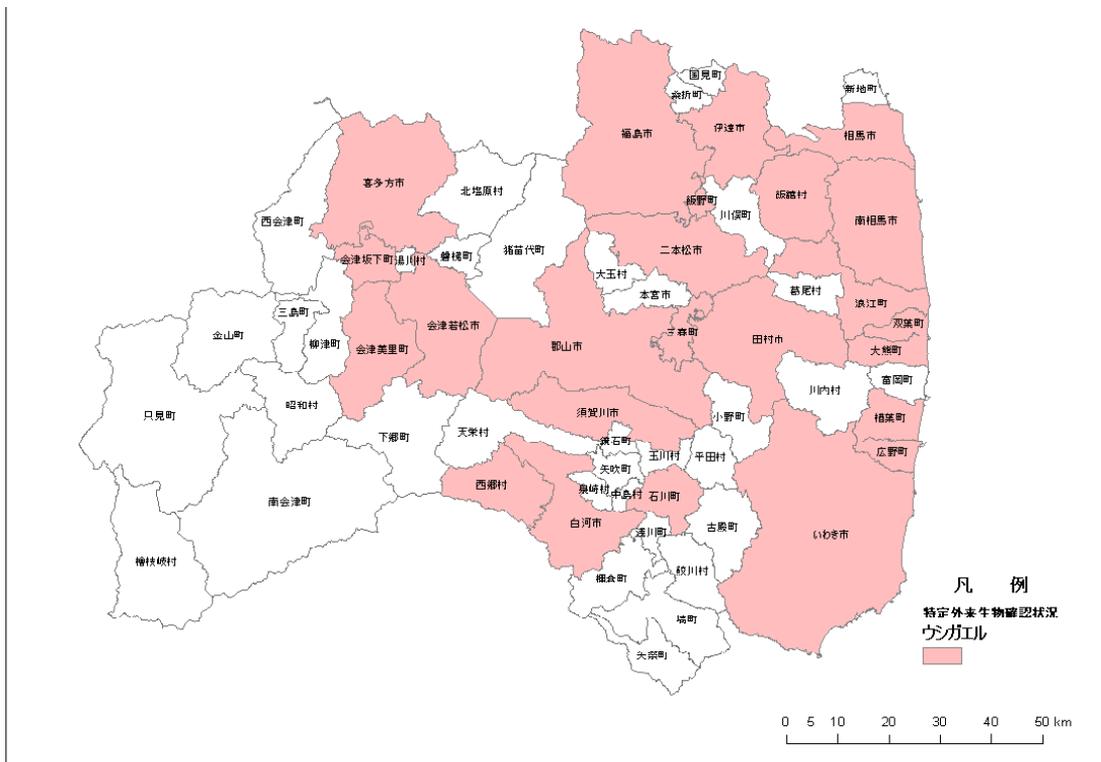
捕食性が極めて強いことから、生態系への影響も大きいと考えられるが、本県における具体的な事例は報告されていない。



ウシガエル

(福島県野生動植物保護アドバイザー 稲葉修氏 撮影)

文献調査によりウシガエルが確認された市町村



⑧ブルーギル

ブルーギル (*Lepomis macrochirus*) サンフィッシュ科 原産地：北アメリカ

導入経緯：1960年に皇室が訪米の際の手みやげとして持ち帰ったものを水産庁の試験研究機関が全国各地の試験場へ分与したことが知られている。また、民間レベルでも各地で放流されたと考えられる。

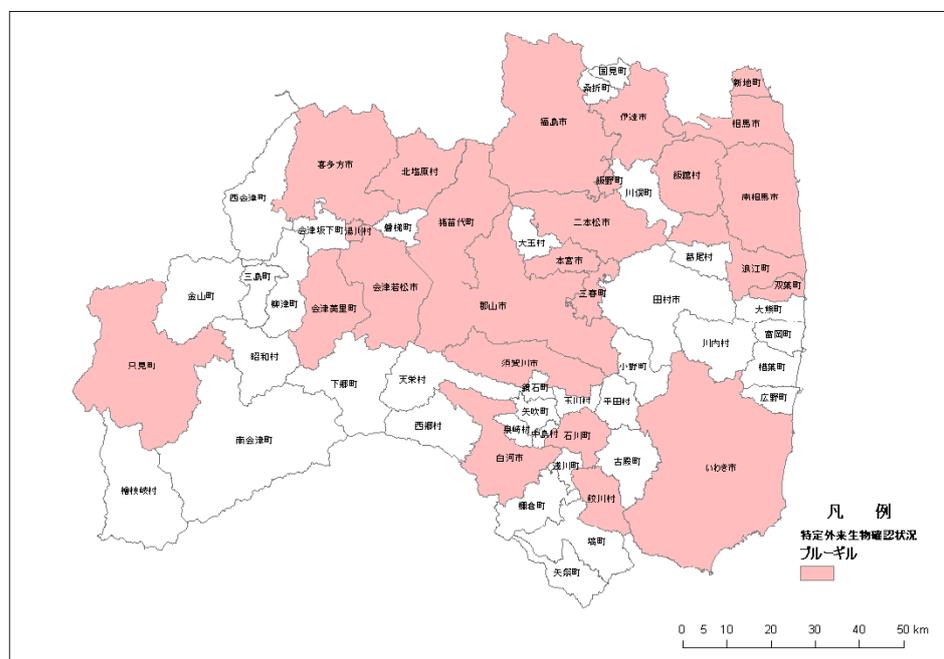
生態：湖沼やため池、堀、公園の池などに生息し、湖では主に沿岸の水生植物帯に、河川では流れの緩やかな水草帯に生息する。魚卵、仔稚魚を好んで食べる。

【調査結果概要】

河川水辺の国勢調査結果、田んぼの生き物調査、レッドデータブックふくしま作成調査データ、福島県外来魚アンケート調査結果（平成 17 年度実施）、福島県野生動物保護サポーターによる目撃情報によると、県内の 25 市町村において確認されている。

阿武隈川、阿賀川流域を中心に、ほぼ県内全域の水域で確認記録がある。

文献調査によりブルーギルが確認された市町村



⑩オオクチバス

オオクチバス (*Micropterus salmoides*) サンフィッシュ科
原産地：北アメリカ

導入経緯：1925年に釣の対象、食用として芦ノ湖へ導入された。1965年頃から徐々に生息域が拡大し、1970年代には意図的な放流により急激に拡大したと考えられる。

生態：典型的な肉食性であり、オイカワやヨシノボリ類などの魚類、エビ、ザリガニ類などの甲殻類を主食とし、水生昆虫や水面に落下した陸生昆虫、鳥の雛まで捕食する。

【調査結果概要】

河川水辺の国勢調査結果、田んぼの生き物調査、レッドデータブックふくしま作成調査データ、福島県外来魚アンケート調査結果（平成 17 年度実施）、福島県野生動物保護サポーターによる目撃情報によると、県内の 45 市町村において確認記録がある。

県内全域の水域で確認されている。

福島県自然保護グループが平成 17 年度に実施したアンケート調査の結果によると、北塩原村の沼ではアカヒレタビラ（レッドデータブックふくしま；準絶滅危惧）がなくなった、相馬市では胃の中からゼニタナゴ（レッドデータブックふくしま；絶滅危惧 I 類、全国カテゴリー；絶滅危惧 I B 類）が確認されるなど生態系への影響が報告されている。

また、オオクチバスの生息する溜池では小型の魚種が確認できない等の影響が報告されている。

文献調査によりオオクチバスが確認された市町村

